

通学合宿「うずしお交遊塾」 実施報告

- 1 趣 旨 今日、青少年の問題行動やいじめなどが大きな社会問題となっている。その原因の一つに子どもたちの生活体験不足、家庭での親子のふれあう機会の減少、地域や家庭での教育力の低下などが指摘されている。これらの課題解決を目的として、子どもたちが家庭を離れ、異年齢の青少年が集って共同生活をするを通して、望ましい人間関係の育成や自主自立の精神を養う。
また、地域の安全・防災について、日常の備えや的確な判断のもと、地域の安全・防災について主体的に行動することや災害時の助け合いの大切さについての理解を深める。
- 2 主 催 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立淡路青少年交流の家
- 3 後 援 南あわじ市教育委員会
- 4 日 時 平成31年1月23日(水)～26日(土) 3泊4日
※高校生リーダーと大学生ボランティアは前泊(2日)して事前研修を実施
- 5 場 所 国立淡路青少年交流の家
- 6 対 象 南あわじ市立南淡中学校区小学3～6年生
南あわじ市立南淡中学校1・2年生
兵庫県立淡路三原高等学校生及び吉備国際大学生(高校生リーダー、大学生ボランティアとして)
- 7 参加者 6名(小学生6名)
- 8 スタッフ 国立淡路青少年交流の家職員、兵庫県立淡路三原高等学校生、吉備国際大学生
- 9 日 程

	16:00 18:00 18:30											20:30 21:30		
1/23 (水)					受付	入所説明	夕食	開塾式 <活動Ⅰ> みんなで仲良くなろう！ (自己紹介・交流会)				入浴	就寝準備	就寝
	6:30	6:50	7:20	8:00	16:00 18:00 18:30			21:00 21:40						
1/24 (木)	起床	朝食	登校	学 校	交流の 家着	自習	夕食	<活動Ⅱ> 3Dハザードマップ(立体)を作ろう！ ・自分たちのまちの地形を知ろう。 ・地域に潜む危険について考えよう。				入浴	就寝準備	就寝
	6:30	6:50	7:20	8:00	16:00 18:00 18:30									
1/25 (金)	起床	朝食	登校	学 校	交流の 家着	自習	夕食	<活動Ⅲ> 防災サバイバルキャンプを体験してみよう！ ・班のみんなと協力して寝床を作ろう。				班毎に就寝		
	6:00	7:00				13:00			15:30 15:40 16:00					
1/26 (土)	起床	<活動Ⅳ> サバイバル食を作ろう！ ・班のみんなと火おこしや食事作り(朝食・昼食)に挑戦しよう。				<活動Ⅴ> 防災サバイバルキャンプをふりかえろう！ ・災害時に必要な物や能力について考えよう。				アンケート記入	閉塾式	解散		

※高校生リーダー及び大学生ボランティアは、毎晩 22:10～22:40 に「リーダー・ボランティアミーティング」を実施。

10 内 容

① 前日研修(高校生リーダーと大学生ボランティア)

セッション1では、ボランティアとは何かについて考えた。インストラクター、ティーチャー、リーダー、ファシリテーター、カウンセラー、インタープリターなど、いろいろな立ち位置があり、「うずしお交遊塾」でも場面によって様々な役割を果たさなければいけないことに気付いた。

セッション2では、参加者との交流会について、「アイスブレイク」の内容、交流会の進め方、役割分担などを考えた。子どもの前に初めて立つボランティアからも、レクリエーションを担当したいという意欲的な声が聞かれた。進め方を考えながら、「初対面の緊張感をほぐすこと」「規範意識をもたせること」というアイスブレイクのねらいについて共有することができた。

② 1日目 開塾式・活動Ⅰ：みんなで仲良くなろう!

「開塾式」では、所長より今回の心構えとして、「いつ来るかわからない災害に油断しないこと」「どんな状況でも最善を尽くすこと」そして「地域の安全・安心を自分たちで守っていくこと」等が伝えられた。引き続き行われた「活動Ⅰ：みんなで仲良くなろう!」では、お互いのニックネームや意気込みを発表し合ったり、レクリエーションを通してお互いを知り合ったりと、和やかな雰囲気の中で交流していた。その後、次長よりロープワークの講義があり、「基本的な巻き結び」と「巻き結びを応用させた結び方」を教わった。また、25日の防災サバイバルキャンプで作るシェルターについて、「心配なことは何か」「どんなことに気を付けたらいいか」等について発表し合った。それぞれの参加者が、自分で考え、積極的に発言していたことが印象的であった。また、「何人で寝るか」という質問に対して、安易な妥協や多数決ではなく、話し合いの中で合意形成をしようとしていたことにも驚かされた。

就寝後のリーダー・ボランティアミーティングでは、今日の活動をふりかえり、「児童に干渉しすぎた。」「説明がうまくできた。」等、成果と課題を挙げ、次の日に不安を残さないようにした。また、参加者の様子や参加者同士の関わりなどについても共有することができた。なお、このミーティングは、毎晩行い、スタッフ・ボランティア間で情報を共有し、次の日の活動に活かすことを目指した。



(エピソード1) 通学合宿ならではの!



参加者は、6時半に起床し、素早く身支度を済ませて朝食会場の食堂に移動し、食事をとるなど、スムーズに朝の活動ができた。出発時刻までの慌ただしい中でも、「忘れ物ない?」「また後でね!」など、参加者同士の関わりが見られた。

学校が終わり、交流の家に帰ってきた小学生は、事務所に「ただいま!」と元気のいい声で挨拶に来た。職員からも、「お帰り!」と温かく声を掛ける場面があり、家庭的な雰囲気ですとてもほほえましく感じた。小学生も一度にたくさんの家族が増えたようで、うれしそうだった。

自習室では集中して宿題や自習課題に取り組んでいた。高校生リーダー、大学生ボランティアに教えてもらったり、褒めてもらったりするのも嬉しかったようで、はにかんだ表情も見られた。勉強の後は、一冊の本をみんなで読んだり、おしゃべりをしたりと、これまでの友だち関係を広げて交流する姿が見られた。

③ 2日目 活動Ⅱ：3Dハザードマップ(立体)を作ろう!

「活動Ⅱ：3Dハザードマップ(立体)を作ろう!」では、兵庫県立淡路景観園芸学校教育研究部 景観園芸専門員 光成麻美氏を講師に迎え、立体的な地図を作製し、地域の危険箇所を推測することで地域の安全・防災について考える機会をもった。ダンボールに等高線の入った地図を仮止めし、10m毎にダンボールをカッターナイフで切り取り、積み重ねて、のりづけするという作業を根気強く、繰り返し行った。また、発泡スチロールを建物に見立てて張り付けたり、河川を描いたりすることで、再現性が高まり、自分たちの住む地域のことだという意識が高まった。

最終日に自分たちの作った3Dハザードマップを見て、気が付いたことを発表し合った。「津波と洪水では被害にあう地区が全然違う。」「海からどんなに離れていても、低い土地には津波が来る。」等、平面の地図では分かりにくいことも、高低差の分かる3Dマップを指で示しながら確認し合うことができた。



(エピソード2) リーダー、ボランティアの交流！

初日から参加者をうまくリードしてきた高校生リーダーや大学生ボランティアであったが、初めて小学生と関わる高校生リーダーは、子どもに干渉しすぎていると悩んでいた。大学生ボランティアに小学生との関わり方のポイントを聞いたり、実際に見たりする中で、自然体で参加者と接することができていた。参加者だけでなく、リーダーやボランティアにとっても、学びの多い経験になった。

④ 3日目 活動III: 防災サバイバルキャンプを体験してみよう!

「防災サバイバルキャンプ」は、与えられた用具や道具（ブルーシート、PP ロープ、寝袋、ロールマット等）を用いてシェルターを作り、真冬の屋外で一晩を過ごす活動である。「津波から命からがら逃れてきたが、水が引く気配もなく、大津波警報も解除されない。今ある物を使い、ここで野宿をする」という設定で活動を行った。シェルターを設置するためには「風が弱そうである」「地面が掘りやすい場所である」「地面が平らである」という条件をクリアしなければならない。設置場所決めは難航したが、安易な妥協や多数決ではなく、全員が納得したうえで合意形成することができた。(※気象台への安全確認、雷チェッカーや熱中症指標計持参、天候が崩れそうなどときにはすぐにログハウスに避難できる準備をしたうえで活動を行った。)

作業を開始してからは、初日のロープワークで学んだ「巻き結び」を駆使し、短時間で骨組みを仕上げることができた。後はブルーシートをかぶせ、ロープで固定すれば完成というところまで来て風が急に強くなってきた。強風に煽られながらも、力を合わせて立派なシェルターを完成させることができた。

就寝前に健康観察と諸連絡、活動のふりかえりを行った。自らの力で乗り切る覚悟をもたせることも大切だが、体調不良時にはログハウスに避難するよう注意を呼びかけた。

(エピソード3) 「まずは命やろ！」

シェルターを作るのはいいが、設置場所がなかなか決まらない。木に囲まれていて風の弱い場所は、木の根で地面に凹凸があり、地面が平らで設置しやすい場所ほど、風が強く吹き込んでくる。全ての条件を満たす場所がなかなか見つからず、参加者の話し合いが長くなり、どうやって決めればいいのか分からなくなった。そんな中、参加者の1人が「まずは命やろ！」と発言したことがきっかけで、設置場所が決まった。複数の条件に振り回されそうになったとき、何を優先するのかを考え直すきっかけを与えてくれた一言であった。



(エピソード4) 去年のリベンジを！

参加者のなかには、昨年度の「うずしお交遊塾」に参加したリピーターもいた。そのうちの1人は、初日の意気込みでも「去年のリベンジをしにきた！」と語り、昨年度うまく作ることができなかったシェルターの形や固定方法の改善点を自主的にノートにまとめて持参していた。別のリピーターは、昨年度のシェルター泊に耐えられず、葛藤しながらもログハウスに避難した経験があった。リピーターは、過去の経験を初参加者に伝え、初参加者はテキパキと動き、参加者一丸となって立派なシェルターを完成させた。出来上がったシェルターを前に、誰からともなく、喜びの声があがった。

全員で作りに上げたシェルターは快適であったようで、リベンジ達成！と満足した様子もありながら、もっと快適なシェルターにするためにはどうすればいいか、参加者同士で話し合う姿もあった。

⑤ 4日目 活動III: サバイバル食を作ろう!

起床後、「ライフラインが止まった状態でも簡単に作れる、温かい料理を作ろう」というテーマで朝食を作った。牛乳パックに火をつけて焼いたホットドッグと、簡易スープという簡単な朝食だったが、シェルターで一晩を明かした参加者の冷えた体を温めてくれた。なるべく洗いや洗い物を出さないように、食器をラップで巻いて使うことやマッチを使った火おこしなど、災害時に使えるスキルも身に付けることができた。

昼食は、「日持ちする食材を使って料理をしよう」「空き缶でご飯を炊こう」というテーマで麻婆丼とポテトサラダを作った。乾物やレトルト食品をうまく組み合わせ、美味しくボリュームのある食事を作ることができた。また、ファイアースターターを使った火おこしや、アルミ缶を加工したアルコールストーブ作りなどにも取り組んだ。



⑥ 4日目 活動Ⅳ: 防災サバイバルキャンプをふりかえろう!

サバイバルキャンプの感想を1人ずつ発表した。「シェルター作りが寒かった。」「シェルターの中が結露していた。」「風や雨の音がうるさかった。」「風を防げていないところがあった。」「ファイアースターターで火をおこすのが難しかったけど、最後は火がついてよかった。」等、具体的な場面を思い出しながら、工夫したことや次回気を付けることについての意見が出された。

防災サバイバルキャンプへの挑戦によって、「自然は容赦しないこと」「協力することの大切さ」を身をもって体験し、痛感したことを全体で共有することができた。

ふりかえりの最後に「自分にできることは何か」「自分にはどうすることもできないことは何か」について全員が発表した。自分にできることを増やし、災害に対応することは大切だが、できないことを明確にすることも大切である。参加者たちは一人ではできないことも、みんなと協力すればやり遂げられることや、自然は人間ではどうすることもできないこともあるということなどを確認し合った。



⑦ 事後のふりかえり(高校生リーダーと大学生ボランティア)

参加者が少人数であったこともあり、きめ細かい実態把握と声かけができていた。その日ごとのミーティングで、問題点と改善策について共通認識をもったうえで活動に臨めたこともあり、スムーズに運営することができた。

前日研修で確認した、インストラクター、ティーチャー、リーダー、ファシリテーター、カウンセラー、インタープリターなどの立ち位置について、意識しながら活動することが難しかったようであった。初参加の高校生リーダーは、子どもの前に立つことに慣れていなかったが、少しずつ子どもとの距離感も掴めてきたようで、指導するべき場面や見守るべき場面によって立ち位置を変えることができていた。

些細なことでも報告し、相談する大切さを感じたようで、今後のボランティア活動や学校生活にも活かしていこうという前向きな意見が出ていた。

(エピソード5) また、帰っておいで!

閉塾式も終わり、解散間近の駐車場では、参加者が別れを惜しんでいた。「来年もこのメンバーで会いたいな!」「また来ような!」と再会を誓う声も聞こえていた。

別々の場所から集まった参加者でありながら、ひとつ屋根の下で活動・生活を共にした「仲間」であったと、改めて感じることができた。

11 参加者の声

<小中学生の感想> (事後アンケートより抜粋)

- キャンプが大変だということに気付いた。
- 難しいこともあったけど、楽しいこともあった。
- キャンプをしたり、体験をしたりするのがいいなと思った。
- 最初は不安だったけど、去年のリベンジができてとってもよかったです。

<高校生リーダー・大学生ボランティアの感想> (事後アンケートより抜粋)

- 助け合うことの大切さが学べた。みんなで協力してテントを作って、ごはんを食べて、いい経験になった。
- 全員がテントで過ごせたことが良かった。全員で協力してテントを建てられたからこそその成果だと思う。

12 成果と課題

【アンケート調査票から】

事業の総合評価では、「満足」と回答した小学生、高校生リーダー、大学生ボランティアは100%という結果から、活動内容に満足していると考えられる。活動内容も「満足」「やや満足」と答えた小学生、高校生リーダー、大学生ボランティアが100%と、内容的にも高い満足度があったとわかる。

【通学型の合宿だからこそ見えるもの】

通学型の合宿は、昼間は学校で勉強し、夕方交流の家に帰って来るといった特徴があり、子どもたちにとっては、「家」を感じられたのではないと思う。「ただいま！」と事務室の職員に元気な声で挨拶する子どもたちの姿や「お帰り！」とあたたかく迎える職員の姿が昨年度同様、印象に残った。

参加者が学校に行っている間に、スタッフ間でスケジュールの確認や問題点の修正ができることもこの事業の特徴である。運営側が一枚岩でサポート体制を作れたことは、参加者にとって安心感を得られたのでないかと感じた。用具の片付け、偏食、身の回りの整理整頓等、生活面で気になることもいくつか見受けられ、教育施設として何ができるのか、どこまで支援できるのかということも今後の課題として取り組んでいく必要がある。

【防災プログラムの活用】

◆「防災」への意識を高める体験活動

「3Dハザードマップ作り」では、参加者数を考慮し、作業量を減らした。参加者それぞれに役割を与え、自分が役割を果たすことが全体の完成に繋がることを意識させたこともあり、集中して作業に取り組むことができた。完成したハザードマップは、立体だからこそ視覚的にわかることも多かった。

「防災サバイバルキャンプ」では、限られた道具を使って、一夜を過ごす（食と住）活動であった。必要な知識と技術を活かし、仲間と協力しながら活動する必要があったが、どの参加者も醍醐味を感じ取れた様子であった。また、寒さの厳しい状況で実施したからこそ、真剣に取り組み、「本当に災害が起こったら、こんな感じなのかなと思った。」という感想に繋がったと考える。

【望ましい人間関係の育成】

◆交流の家での活動を通して

参加者は同じ学校の友だちや、社会体育のチームメイトという既存の人間関係もあったが、活動を通して新たな人間関係を構築していった。特に3Dハザードマップ作りや防災サバイバルキャンプでは、お互いに協力し、支え合いながら完成に至った。共通の目標に向かって、力を合わせる心地よさを味わっていたようであった。

別れの際には、再会を誓い合う姿も見られ、中1ギャップ解消という視点でも効果があったように思われる。

【より充実した事業にするために】

◆学校、関係諸機関等との連携

事業前に、各学校「うずしお交遊塾」についてご紹介させていただき、本事業へのご支援・ご協力をお願いする機会をいただいた。事業中も、登下校時の安全面のことや登下校時刻についてご意見をいただき、通学路のパトロールやスケジュールの調整を行うことができた。

兵庫県立淡路三原高等学校、吉備国際大学には、4泊5日（高校生、大学生は事前研修で前日に1泊）という長期のボランティア活動でありながら、本事業への参加にご協力をいただいた。

3Dハザードマップ作りや最終日のふりかえりでは、外部講師を招き、防災を切り口にした本事業の趣旨に迫ることができた。

今後とも、各学校や関係諸機関等と連携し、事業内容について検討を重ね、中1ギャップ解消プログラム事業として、更に実用性・汎用性のあるプログラム内容となるよう改善していきたい。



主催 国立淡路青少年交流の家

〒656-0543 兵庫県南あわじ市阿万塩屋町 757-39

TEL 0799-55-2696 FAX 0799-55-0463

<http://awaji.niye.go.jp/hp/>

体験の風を
おこそう